

『にわとり』のお話

森戸 祐幸(社長)

ある日、会社のA君が、ちょいちょい物忘れを繰り返すので「君は本当ににわとりみたいだな。」と怒った。

怒られた本人は、きよんとんととして、私の言っている事がわからなかったらしく、「ところで社長、にわとりって何ですか？」と尋ねる始末である。

私はカッカして、「にわとりも知らないのか。だからにわとりと言われるんだ。」と声をあげ、会社の周りの人たちにも、「君、にわとりって知っているか。」と尋ねたが、意外にも、私が言わんとしているにわたりの意味を、誰もわからない様子だった。

こんなやりとりをしているうちに、私はすっかり怒りを忘れてしまい、にわたりの説明を始めた。

「……実は私が子供の頃、田舎でにわとりを飼っていた。毎日にわとりに、ぬかや野菜の葉や豆を、エサとして食べさせていた。

にわとりは、おなかがいっぱいしている時、どんな葉でも食べるので、悪戯の私は、赤い唐辛子を手にとり、にわとりに見せた。すると、にわとりは、近づいてきて唐辛子をくわえたが、2、3歩、歩くと、吐き出して逃げて行

った。ところがしばらくして、そのにわとりは、唐辛子を見つけると、また近づいてきて食べ、2、3歩、歩くと吐き出した。

このようににわとりは、唐辛子が辛いということを忘れ、何度でも食べようとする。そこで、私の田舎では、あやまちをすぐ忘れ、何度でも同じあやまちを繰り返す人や、2、3歩、歩くと前のことをすぐ忘れてしまう人を、『にわとり』と呼んでいるわけである……」

都会で育った人には、到底解らない説明だろう。私自身も笑ってしまった。もともと、最近のにわとりは、食生活も人間並みに向上したので、辛い唐辛子など食べるかどうかわかりませんが！

そういえば、私には、この話以外にも、にわたりの思い出がある。

大学生の頃、クラブ活動で裏磐梯に合宿した。料理当番が廻ってきた私は、大好物の——その日までは！——にわとり料理を作った。空腹の時の料理当番なので、つまみ食いしながら、ヤキトリやとり鍋、そして鳥のササミ、モツ料理など工夫して作った。料理が出来上がって、皆で食事をした。

ところがその晩、このにわとり料理にあた

ってしまい、下痢と発熱で悩まされ寝込んでしまった。

それ以来、私は、にわとり料理に非常にアレルギーになり、にわたりの臭いをかいだだけで食欲が減退し、にわとりアレルギーになってしまった。

ですから、皆さん、くれぐれも、私に『にわとり』と言わせることのないようにしてくださいね。

私とにわとりには、不思議な縁があるものだ。



裏磐梯合宿での鳥料理
(森戸・大学1年の時)